藤子不二雄Ⓐ作品から「いじめ」を考える

法学部４回生　長谷 悠太

※本稿は言葉の定義や考え方など諸々について意見が分かれるだろう問題を扱っていると認識しています。暴論である、あるいは不快に思う箇所があるかもしれません。個人的意見としてご容赦ください。

・なぜいじめか、なぜⒶ作品を取り上げるのか

近年､学校でのいじめや体罰を原因とした悲しい事件が頻繁にニュースに取り上げられ、社会問題の一つとして大いに注目され、現場や行政、そして家庭がそれへの対処を求められるところとなっている。これは難しい問題で、例えばいじめについては加害者を悪として排除すれば直ちに解決するということでもないだろうし、体罰についてもなぜ教師は手を挙げてしまったのかをはじめとして、その状況や経過についてしっかりとした検証をした上での謝罪や懲戒、そして迅速に善後策を講じることなどが望まれる。

本稿では､（結果としてそうなるかはさておき）問題解決について自論を展開したり現代社会を憂えたりということをする気はない。一連の報道に触れ、藤子不二雄、特にⒶ先生の作品に登場するいじめについて取り上げてみるのは面白いのではないかと思ったのである。

個人的な意見であることを承知で言えば、F先生は子供たちに夢と希望を与えるSF（少し不思議Sukoshi Fushigi）作品を描くことを第一に考えておられたと思う。そのためか日常世界を舞台とするF作品の登場人物は、ジャイアンやブタゴリラに代表されるような主人公たちをまとめあげるガキ大将キャラはいても、彼らの暴力や（リサイタルなど強引に巻き込む）強制力といった行為が「いじめ」であると捉えられる向きは少ない。日常茶飯事としていじめが繰り返されても、いじめられる側が深刻な事態にまで追い詰められるということはない。およそ話の導入やオチとして用いられているにすぎない。のび太がジャイアンに痛い目に遭わされても、ドラえもんは今度はどんな道具を出してくれるのだろうとその先の愉快で明るい展開に期待するから、読者もそんないじめを許してしまう（尤も、大長編などで垣間見られるのび太たちの友情の深さや団結力の高さを知っているからかもしれないが)。他方でⒶ作品はどうだろう。例えば『魔太郎がくる！！』『ブラック商会変奇郎』『少年時代』はいずれも 1970 年代に発表された作品であるが、読者対象がやや

高めであるためか[1]、（学校内での）いじめそのものを題材としてかなり意欲的に取り上げられているように感じる。また、大人向け作品である『ミス・ドラキュラ』や『無名くん』は、普段は同僚に容姿が優れない・地味・活発でないなどと冷ややかな目で見られたりネタにされたりする主人公の変身前後を滑稽に描いている。しかし、これは主人公が特殊な能力を秘めていて普段と立場が逆転できるから面白いのであって、見方によっては社内、もっと言えば社会全体の理不尽なハラスメントを暗に皮肉っているとも言えるのではなかろうか。その他、ブラック・ユーモア短編などでは、やりたくない麻雀のカモにされて陰で涙を流す気弱社員の姿も散見される。F作品では異世界から（現代人が持ち得ないような能力を持つ）人物がやってくることで日常が少し不思議な非日常に、という展開がなされることが多い。一方、Ⓐ作品で描かれる日常世界におけるヒーローの多くは、辛うじて現実世界にいるかもしれない生身の人間（怪物太郎やビリ犬など例外はもちろんあるが、ハットリくんや猿などはギリギリ存在しうると言えはしないか）に留まるために、つまり日常の域を出ないからこそ、人間の本能や欲望などに関するブラックな事柄にも真っ向から挑めるのかもしれない。

「いじめ」は何も現代特有の社会問題ではない。F 先生Ⓐ先生共に、自らもいじめられていたことがあると語っておられるし、戦前戦後そして今もいじめは存在する。およそいじめをなくすことはできないのだろうし、人間とはそういう生き物なのだろう。そもそもいじめがあるからこそこのような作品が描かれるのだし、また読者はそれに共感するところがあるのだ。限界に達していないだけで、多くの人がいじめによって何らかのストレスを感じている・感じた経験はあるのではないだろうか。

藤子作品の多くに共通して言えることであるが、数十年前に発表された作品でも全く古くなく、むしろこうなる将来を予測していたかのような話が少なくない[2]。いじめを扱った話もそうだ。いじめが面白いというとんでもない誤解を生みそうであるが、こういう問題が溢れる今だからこそ、作品が描かれた当時の社会情勢などと合わせみて、作品の面白さをさらに見出すことができると言ってよいだろう。前置きが長くなったが、以下では、ごく簡単にではあるがⒶ作品のいくらかをいじめの観点を中心に紹介して、後半は勝手な独り言を綴りたいと思う。

---

[1] 『魔太郎』と『変奇郎』は週刊少年チャンピオンに、『少年時代』は週刊少年マガジンに連載された。

[2]例えば、校内暴力が社会問題となったのは『魔太郎』連載後の 1970 年代終盤以降と言われる。また、ブラック・ユーモア短編『 明日は日曜日そしてまた明後日も……』は過保護に育てられた会社員の引きこもりを描いているが、1971 年に発表されたことを考えれば先見の明を感じさせる。

・魔太郎がくる！！（1972～1975 年）

主人公である浦見魔太郎は友愛学園中等部の学生。典型的ないじめられっ子で、毎回様々な人物からのいじめや悪行に遭う。魔太郎も慣れっこであるのか最初のうちは許容しているが、徐々にエスカレートして魔太郎の我慢の限界に達すると、「うらみはらさでおくべきか」と自らが持つ不思議な超能力（うらみ念法）などを用いて復讐を遂げる。連載が進むと、隣家に引っ越してきた阿部一家の一人息子でこれまた不思議な能力を持つ切人との応酬や連携の良さを描いた話や、魔太郎自身以外に向けられた、彼の家族や友人への危害に対して怒りの復讐を果たす話も増えてくる。終盤ではなぜ魔太郎が超能力を持っているのかという秘密が明らかにされ、1 話読み切りを基本としながらも連続物として楽しむこともできる。

さて、今作ではなんと言っても魔太郎の復讐がすさまじい。当初は毎回のように学園から生徒が“怪事件の被害に遭い”姿を消していた。あまりに凄惨であり、それでいて現実的なエピソードは、そのオチの恐ろしさゆえに単行本未収録となっているものも多くあるらしい（私も多くが未読）。それにしても、魔太郎はなぜここまで因縁をつけられ痛めつけられるのか。それほどの恨みがあるようには到底思えない。例えば「ねじれた心にはねじれた顔！！」中のセリフで「どういうわけだがあいつのオドオドした顔を見てるとイジメたくなってくるよ」というものがあるが、いじめは大体が特に理由がないにも関わらず、だんだんとひどくなってしまうというものかもしれない。理不尽な仕打ちに対する魔太郎の復讐は爽快である。だがこれはフィクションとしてだから面白いのであり、現実で起こっては加害者被害者どちらの立場にしてみても胸が痛くなるものばかりだ。

いじめにいじめ抜かれる苦痛の日々を生きる上で南由紀子の存在は大きい。クラスのマドンナで優等生の彼女は、魔太郎にも分け隔てなく接する。周りの言うことに流されることもあり、絶対的味方であるというわけではないが、生きる希望と言ってもいいかもしれない。時に敵側にまわることがあっても、彼女には決して危害を加えることはない（彼女の親戚はともかく…）。

・ブラック商会変奇郎（1976～1977 年）

主人公の変奇郎は骨董品屋･変奇堂を自営する家庭の中学生。非力でおとなしい性格で、同級生や店の客から暴力や脅迫を受けることが多いが、逆に魔力で相手をやりこめ恐喝めいた方法で金銭を請求する裏の顔を持っている。魔太郎はサラリーマン家庭であったのに対して変奇郎家は自営業である。そのため、変奇郎や店の主人である祖父をだまして強引に商品を我が物にしようとする客など、敵が大人であることも多い。連載初期では、どの

ように金銭を（適正な額を払わない客に）“支払っていただく”かが痛快に描かれている。中期以降は金銭の回収ではなく、精神的慰謝料として復讐を果たすというオチが中心になるが、いずれにしても「変奇郎あるいは家族・親友がいじめられたことに対して変奇郎が何らかの方法でやりこめる」という展開が基本である。

本稿は、親友で同級生の満賀道夫[3]関連のエピソードを取り上げたい。『まんが道』の主人公と同姓同名である彼は、やはりⒶ先生自らがモデルと思わせる漫画家志望だ。彼は連載中期の初出以降、モブにとどまることなく登場回数を増やし主要キャラの一人にまでなった。いじめられっ子と言ってもよい彼のおかげで、学校でのいじめについても描かれることが多くなった。

学校での満賀へのいじめを最初に扱ったのは「ハエ男」の回だ。映画をヒントに「ハエ男」の漫画を書こうとした満賀に対して、同級生影裏が執拗に嫌がらせをするという話である。影裏はからかって満賀のアイデアノートを破るにとどまらず、満賀が掘り出し市で入手しようとし、また変奇堂から譲り受けた古代の珍しいハエ取り機を強引な手段で奪い取る。自らは全く興味のない品であり、満賀にどんな恨みがあるのかと問い質したくなる陰険さがある。「夢の船旅」も似たような展開である。豪華客船クイーン・エリザベスⅡ世号に興味を持った満賀に対して同級生曽根見は写真アルバムを貸すが、その対価として満賀の宝物である手塚治虫の『LOST WORLD』の初版本を要求し、遂にはアルバムをなくしたと思わせ、代償としてそれを奪い取ろうとするという話だ。これらをはじめとする満賀への嫌がらせに対して変奇郎はどう策を講じるか。それは作品を読んで楽しんでいただきたい。

↑『ハエ男』より。親友である満賀に対するいじめにも変奇郎は立ち向かう。

---

3 余談だが、初出は「夫」表記であるものの後に登場する際には「雄」表記となっている

二人は共に趣味や興味の対象が近く、また憂き目を見ることが多いこともあってとても気が合う。自分が弱いと分かっていても、どちらかが不遇に遭えば他方は自分に害が及ぶことなど構わずして支えようとする。

『魔太郎』と『変奇郎』はいじめられっ子の主人公が実は不思議な能力を持っていて〜、と物語の展開そのものは似ている部分が多い。だが支えとなる同級生については異なってくる。『魔太郎』の由紀子は優等生でクラスの人気者。それでいて思春期の異性である。これに対して満賀は対照的だ。似た境遇で互いを分かりあえる存在というのもつらい毎日を生きる上で大きいに違いなく、このあたりを比べて読むのも面白いだろう。

・少年時代（1978〜1979 年）

柏原兵三氏の『長い道』を漫画化した作品。太平洋戦争末期、東京から富山の漁村に縁故疎開した進一と、疎開先で同級生となるタケシとの約 1 年間にわたる関わりを描いている。余談であるが、井上陽水氏の名曲『少年時代』を主題歌とした実写映画は数多くの賞を受賞している。

進一は東京育ちのため、富山の子たちからしてみれば身なりや話し方がどうしても気取っているように映る。多少のいじめは進一も覚悟していたわけであるが、身を置くことになる光禅庵で入村間もなく出会ったタケシは、意外にも進一を温かく受け入れた。大人からの信頼も厚くクラスの級長でもあるタケシとの初対面で、進一はこれからやっていけそうだという感触を得る。夏休み中の疎開ということもあり比較的自由である内に、近隣のあちこちを訪れる。進一は海岸のある隣村の生徒数人から縄張りに立ち入ったことでイチャモンを付けられて暴力を振るわれる。そんな危機から、タケシは相手をコテンパンにのめすことで救い出し、そのことで進一はタケシを親友だと思うようにまでになる。ところが、国民学校登校初日、タケシは進一に対してまるで冷たい態度を取る。それどころか、ある合図で一斉に級友から「村八分」に遭う。タケシはアメとムチを上手く使いこなすことでクラスの権力者として君臨しており、歯向かうことのできない（親や教師に言うこともない）級友たちは、タケシの思うままに従わざるを得ないような状況になっていた。タケシは東京出身の進一を学校でのライバルと考えており、級長（進一はなる気は全くないのであるが）の座を、そして今まで築き上げてきた地位を失いたくないのだ。大人たちからは模範生のように映るのも、背後に同様の理由があると言ってよいだろう。しかし、級友の皆がこの状況を好んでいるわけではない。（一部の）生徒は何とかしてタケシを引きずり下ろしたいと考えている。常に火種は暴力と隣り合わせで、タケシが上手くふるまうこ

とで爆発の瞬間を逃れてきた…。

この物語の主人公は進一なのだが、タケシと進一、タケシと同級生、タケシとその家族、タケシと他村の生徒…、というように、タケシと誰かとの関係を進一の視点で描いている作品であるということもできよう。作品を読めばわかるが、タケシは何も暴力を振るうだけの生徒ではない。クラスでは一、二を争う優等生で進学希望、進一の本を借りて読むなどの読書家、畑仕事に熱心…、といくつも模範的な行いが見られる。学業だけでなく体力でも優れているのだから、人望もあればクラスの人気者となるのは確実だ。実際タケシは普段の活躍からして大人からの信頼も厚く、性格に著しい問題があるとも思えない。進一も学校外ではタケシの思いやりに幾度も触れている。暴力などで押さえつけなくとも学友からも真の尊敬の眼差しを受けることは可能であったはずなのだ。それでいてなぜタケシは恐怖政治のような方法で君臨するのか。

戦争末期という異常期の中でタケシはあまりに多くの面でできすぎたのではないか。あらゆる面で他の生徒よりも上に立ちたい。そんな思いがあるからこそ、進一に難関の中学受験の勉強をすることを持ちかけながら、実は家庭の事情でそれが叶いそうにないという非情な現実がタケシをさらに苦しめるのだろう。進一はタケシの心中を察し、また周囲のタケシへの思いを知ることで、タケシとの関わり方について終始葛藤する。タケシは進一に対して、級友を巻き込んだ脅迫や無視という態度をとる一方で、心を許していたところがあった。同級生全員に圧政をしく彼にとって、東京から疎開してきたヨソモノでかつ学業優秀な進一は真っ白な関係から真の友情を築くことのできる相手だとして、彼なりに努力したのではないか（当初は村での生活ルールを教える目的だけだったのかもしれないが）。進一も折に触れてタケシの内面を知る度に、彼は本当のいじめっ子ではないとどこかで確信し、しかしやはりシカトされたりすると裏切られたような気持ちにもなる。進一は常に緊迫したタケシと同級生の関係をどうにかするだけの力を持っていないにせよ、同級生唯一の理解者として苦しむ…こうした少年たちのもどかしさに作品の魅力があると思う。

←『少年時代』より。学外ではやさしく、
そして真面目なタケシだが…。

・独り言、まとめ

さて、軽く紹介したにすぎないがどのような印象を受けられただろうか。Ⓐ作品で描かれるいじめは、暴力から脅迫、詐欺まがいのものまで様々で、見るに堪えないものも少なくない。血を見るのが苦手な筆者にとって自分自身で意外だったのが、本来苦痛なものでしかないはずの殴り合いによる流血場面が幾度となく登場する『少年時代』は不思議と早く続きが読みたい一心だったということ。タケシは絶対的悪ではないが、彼の支配体制は簡単には揺るぎそうにない。それでもめげずに革命を目指す志。『魔太郎』や『変奇郎』でも、いじめられる側は一方的に悪に屈服するまま終わらない。仕打ちに対して何倍ものお返しで正義の鉄槌を下して懲らしめる。主人公たちは力が弱くても心は強いのだ。本来的弱者が強者を倒すことの痛快さ。下克上。いじめがテーマの根幹でありながらも、それに対して主人公がいかに立ち向かい、打ち克つか――現実はなかなか漫画のようにはいかないものかもしれないが、それでも悪に屈せずして遂にこれを倒す彼らに、読者は自分自身（の体験）を重ね合わせることでスッキリするのだろう。悪は最後には滅びるのだ。

少年向けだけでなく、『ミス・ドラキュラ』など大人向け漫画を見ても、いじめの基本はおよそ変わらないように私は思う。例えば、ある集団の中で特定の者を弱者と見るや（いなければ設定して作り出す）、暴力や陰口、あるいは築いたグループ内に入れ込まないことで、自らが弱者の立場に、仲間外れにされないように先手を打って庇うのだ。集団では仲間意識も生まれれば、その一方で関係のもつれも孕む。自分が排除の対象となるのを避けるためにスケープゴートによって自己の保身を図る。そのうちにいつか形勢逆転されることを恐れて、付け入る隙を与えまいと弱者へのいじめがエスカレートしていく。いじめる人間こそが弱いとはよく言ったもので、弱いゆえに自らが傷つけられる前に他者を傷つける。自慢によって相手よりも優位に立とうとするのも、自分は弱いということを知っていて、それを払拭するために、財力やコネなどを活かして「アイツになら絶対に勝てる」という有利な土俵に持ち込むという心理が働いてのことだろう[4]。

本稿で取り上げた作品を読む際には、いじめられている主人公の側だけに感情移入をするのは惜しいと注意をしておく。なぜいじめを犯したのかという加害者側の心理に注目することも作品を味わう上で、またいじめを理解する上で重要なことだと思うのだ。セリフや事実行為だけでなく、加害者の表情（目や汗が雄弁に物語っていたりする）をじっくり追うことで見えてくることも少なくないだろう。いじめている時とそうでない時の表情の

---

[4]スネ夫ののび太に対する自慢やジャイアンに対する腰巾着的態度を思い起こしていただけるとよいかもしれない。

差に感じることもきっとあろう。見方によっては加害者も被害者の一人であるという例も少なくないのだ。もちろん全ての作品に共通することだが、登場人物の心情をどのように解釈するかは読者諸氏に委ねられており、何が正解ということはないことには気をつけておきたい。筆者がここまでに述べている作品の感想諸々についても、あくまで一個人の解釈にすぎないのであるから、どう取ってくださっても構わない。

「目には目を、歯には歯を」と自ら暴力を以て仕返しをして許されるようなことがあっては法治国家として論外。かと言って泣き寝入りもできないから、司法などに解決を求めることとなる。いつか必ずしや訪れる報いの時まで悪や苦しみに負けない心は養わねばならない。もしも今いじめに苦しんでいる子供たちが、これら漫画から（もちろん何か他のことからでもいいのだが)、主人公たちの強さを感じとって明日への希望を沸かすことができるとしたら…。

何も一人だけで戦うことはない。作中では主人公たちはいじめられていることを周りにほとんど打ち明けずして自力で戦っているが、勇気を出して相談することも立派で難しい決断だ。家族が一番の身近な存在だろうし、由紀子や満賀のように周りの圧力や空気感に惑わされることなく接してくれる同級生というのもきっといる[5]。本稿ではほとんど触れなかったが、大人であってもそうだ。セクハラやパワハラに加えて、近年ではソーハラ（ソーシャルメディア・ハラスメント）も増え、大人のいじめも複雑化しているとのことだ。大人は往々にして簡単に弱音を吐けないものであり（『ドラえもん』「パパもあまえんぼ」などからも察することができよう)、また子供以上に体面やプライドを守る必要を感じてしまうだろうから、一人だけで解決を図ろうとしてより苦しむ結果となっていることもある。時間はかかっても、自分の境遇を理解してくれる人を見付け、頼れるようになれれば。人との出会いは縁だが、いじめる奴もいれば助けてくれる人もいるはず。「う・ら・み・は・ら・さ・で・お・く・べ・き・か」――自分や周りの人々、前途ある未来を信じて、どんなに今がつらいとしても、いじめを耐え抜くだけの負けない気持ちを忘れないでもらえたら…。作品を読んでいて、改めてそんな思いを抱いた。いじめの当事者である人もそうでない人も、本稿をきっかけにⒶ作品に触れて何かを感じることになるとすれば嬉しい。

---

[5] 実際いじめは助けたいと思う子がいても、自分自身も被害者の立場に立たされることを恐れるといった心理が働いて、思うように助けられない事例は少なくないのであるが。